

ゆりかごだより

2021年11月号 (No.1)

RSウイルス (あーるえすういるす)

RSウイルスは新生児でも感染します

赤ちゃんは、生まれて半年くらいまではお母さんから移行した免疫抗体があると言われていたが、RSウイルス (Respiratory syncytial virus) に関してはその期間であっても感染症状を引き起こします。RSウイルス感染症で入院された赤ちゃんのほとんどはお兄ちゃん・お姉ちゃんや、赤ちゃんと接触した人に「かぜの症状があった。」と話されています。当院でも生後2週間以内にRSウイルスに感染し、ミルクが飲めないとのことで入院された赤ちゃんが何人かいました。

国立感染症研究所によると、感染経路としては、RSウイルス感染症患者から咳やくしゃみで飛び散るしぶきと、呼吸器からの分泌物 (痰や鼻みず) に汚染された手指や物品を介した接触が主なもので、特に濃厚接触を介して起こるとされています。

RSウイルスに感染し、最も重症な症状を引き起こすのは生後数週から数ヶ月の赤ちゃんで、低出生体重児や心肺系に基礎疾患があったり、免疫不全のある場合には重症化のリスクが高いとされています。流行するのは11月～1月の寒い時期とされていましたが、ここ数年は夏でも発症していますので季節性はやや薄れてきている印象です。

潜伏期間は2～8日、発熱、鼻汁などのいわゆる「かぜ症状」が数日続き、咳が出てきます。赤ちゃんは鼻呼吸しかできませんので、鼻がつまってしまうとうまくミルクが飲めなくなります。またせっかくなので飲んだミルクも、咳とともに吐いてしまうこともあり、お母さん方を不安にさせます。十分な哺乳ができないと脱水となり、活気が無くなります。

RSウイルスに対する治療は基本的には呼吸が苦しいときには酸素を投与したり、鼻がつまっているときには吸引 (鼻水をチューブで吸い取る) してすっきりさせてあげるといった呼吸管理と、点滴による水分投与となります。菌ではないので抗生物質は使用しません。

RSウイルス感染症にかかっても、活気があり、水分摂取ができて食事が摂れていれば自宅で療養となります。RSウイルスに感染した子どもをお世話する成人も感染することがあります。ご家族全員かかってしまうと看病する人がいなくなってしまうので、手洗い、マスク、手指消毒・・・コロナウイルス感染症で身につけた日頃の感染対策は続けていきましょう。

まとめ

RSウイルス感染症は新生児でもかかります。お兄ちゃんお姉ちゃんのいるご家庭は、特に注意してあげてください。

生後半年までは特に重症化しやすいので注意が必要です。特に低出生体重児、心臓や肺に基礎疾患のあるお子さんはワクチン接種を受けておくことをおすすめします。

基本的な感染対策を
続けましょう。



長野赤十字病院 病後児保育室ゆりかごでは、病気や怪我の回復期にあるお子さんをお預かりしています。

感染症の流行期などに「ゆりかご便り」として情報を発信してまいります。

長野赤十字病院
病後児保育室 ゆりかご
TEL 026-226-7753



ご利用についての詳細は長野赤十字病院ホームページをご覧ください。

QRコード または「長野赤十字病院 ゆりかご」で検索